

共同研究 ● 聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究（2013-2016）

2014年度は3回の研究会を開催した。当初2015年3月の開催も予定していたが、予算執行の事務的な都合により、断念せざるを得なかった。軌近の大学研究者の過重な労働実態から見れば、ほぼ3月のみが研究に専念できる時期である。人類学自体の地盤沈下が目立つこのごろ、事務的な都合を優先させることは、人類学のナショナル・センターとしての国立民族学博物館（以下、民博）のミッションを放棄する結果になる。まことにとって嘆かわしい限りである。

本研究会は、ロシア、中国、インドを対象とする研究者で構成されているが、昨年度第1回目（2014年6月14日）は、ロシア組の発表であった。高橋沙奈美（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、以下北大スラブ研、敬称略）の「奇跡の起こる場所——ロシアにおける聖人崇拜の伝統とその現代的諸相に関する予備的考察」では、まずロシアの聖人崇拜について、正教会では聖地がほぼ聖人の墓所の、奇蹟（奇跡）譚をともなう場所であることが示され、中世からソ連時代を通じて民衆の自発的信仰として発生し発展してきた聖人信仰は、ソ連崩壊とともに正教会による「列聖」という「教会政治」が介入することで、変容を余儀なくされていることが指摘された。ここでとくに問われているのは、聖地に関わる、奇蹟をともなう物質性（不朽体）と場所性、民衆性と政治性とのせめぎ合いの局面であった。

こうした問題意識は、後藤正憲（北大スラブ研）の「モノから場所へ——ロシア・チュヴァシの在来信仰をめぐる政治学」でも踏襲されていた。後藤の報告はロシアのヴォルガ河上流域にあるチュヴァシ地方における現地調査の知見に基づいている。この地域はテュルク系のイスラームから正教会に改宗したチュヴァシ人が多数を占める。チュヴァシは在来信仰として至高神トラを頂点とする諸神格への信仰を持っていたが、なかでキレメチとイエレフへの信仰がチュヴァシの枠を超えて広く信仰されており、正教会はこれをいずれも悪霊として位置づけた。

後藤は結論的に、モノから身体へ、身体から精神への移行には個別具体的な差異を同一化する暴力性が含まれており、その隠蔽された政治性に自覚的であるべきだと述べる。これがまさに聖地の政治経済学であることは言うを俟たない。また、聖性、聖地にはモノ、人、奇蹟（奇蹟）、不朽体などの物

質性が不可欠であることが高橋と共通して指摘され、また場所、空間の概念のさらなる検討が必要であることなど、本研究にとって根本的かつ有意義な議論がなされた。

第2回目（2014年10月4日）は、インド組の発表であった。松尾瑞穂（民博）の「インド・ヒンドゥー聖地の『宗教産業』と在地社会の変容に関する予備的考察」では、中部インド、マハーラーシュトラ州南部の聖地トランバケーシュワルの事例を通じて、聖地を抱える在地社会の変容について考察された。初めにヒンドゥー聖地の自然的、社会的条件、職能者としてのブラーマンの存在、そして聖地巡礼の特徴が述べられた。とりわけ1990年代以降の経済発展と都市中間層の拡大、それに2013年施行の迷信禁止法などを背景にした、聖地トランバケーシュワルにおける祖先供養、贖罪儀礼の変容とそれともなう「宗教産業」化などの総合的な研究が必要であることが指摘された。

前島訓子（名古屋大学）の「インドにおける『仏教聖地』構築の諸相——『聖地』の場所論的視座」は、北インドの有名なボードガヤー（ブダガヤ）の「仏教聖地」化の過程と、とくにヒンドゥー教との関係とその展開についての歴史的、実態的な考察である。ボードガヤーは今でこそ代表的な仏教聖地のひとつであるが、長らく廃墟状態にあり、またヒンドゥー聖者の管理下にあった。しかし、19世紀に仏教遺跡が発掘されることで、釈尊仏陀悟りの地として仏教聖地化が進んだ。ボードガヤーの聖地化の特徴は、在地社会の多宗教状況のなかで、世界の仏教ネットワークによる仏教聖地化のメカニズムが発動することで、諸宗教間の関係にさまざまな変容がおこったことである。

両氏の報告ではいずれも聖地化の過程でさまざまな利害が発動する状況について、文献資料と現地調査資料とを合わせた歴史的、実態的な考察が行われていた。ここでも、聖地における場所性、空間性の問題が共通して指摘されている。前島の報告は基本的に社会学的「場所」論に依拠している。ただ、場所、空間概念は近年とみに社会科学の関心の的になっている感があるのに対して、いまだ十分に整理されていないうらみもある。これらの概念については、地域、専門領域の枠を超えた整理が必要であることが、あらためて認識せられた。



再建された教会のきよめ式に集まった人々。元の教会は20世紀初めに在来信仰の要所に立てられた（2005年8月、チュヴァシ共和国、アレクサンドル・ネフスキー修道院、後藤正憲撮影）。

第3回目(2015年1月31日)は、趣向を変えて北大スラブ研において公開で開催した。本研究グループのうち4名が同センター所属であり、さらに幅広くスラブ研究者などからの批判をうけたいと考えて、北海道での開催を計画した。当日は、元同センター長宇山智彦氏にコメントをお願いしたほか、若手研究者数名が研究会に参加し、議論にも活発に加わってもらった。そこでのこれまでとは異なる視点からのコメントは大いに傾聴すべきものであり、われわれののちの研究の進展にも大きく貢献してくれるものであった。関係諸氏には感謝を申し上げたい。

報告は、望月哲男(北大スラブ研)、韓敏(民博)によるものであった。両氏に共通していたのは、社会主義圏における人物の、それも生家、生地、聖化、聖地化に関連するテーマであった。その際基本的な問題として、無前提に「俗人」の「聖化」と捉えがちであったのに対して、たとえば中国語の「聖」概念を対置したときに、俗から聖へという前提そのものが、西欧的、近代的な概念化に引きずられていることが批判的に検証されるべきであると指摘された。さらに、いずれもが、生誕の家や地といういわば「起源」がより重要な意味を持つことも指摘された。その意味では、聖俗概念そのものの根本的再検討に迫るべき方向性を示唆した報告と議論であった。

韓の報告は、中国の毛沢東への信仰について取り上げたものであるが、その前提として、漢語の意味に遡って聖概念を考えると、聖俗の二分法を前提としたらえ方とは全く異なった意味があることが示された。さらに中国の古代から現代に至る時間の流れのなかでの聖地の概況が総括されたのち、1930年代から現在に至る毛沢東の生家の聖化、聖地化の過程が、1990年代半ばからの自らの調査資料を駆使しながら説明、考察された。とりわけ1980年代からの政治的利用が極まった21世紀に入ってからの観光化の過程が詳細に検討された。なかで、世界のグローバル化とローカル化の同時進行という事態が毛沢東信仰にも顕著に見られることが指摘された。これは本来の意味でのローカル化にほかならないであろう。

望月の報告では、ロシアにおける「地主領地」という都市の外にある地主貴族の領地のなかの、トルストイの生地ヤースナヤ・ポリャーナの地主領地の有り様が、トルストイの名声とともにロシア以外にも影響を与え、身近な例では武者小路実篤らによる「新しき村」や、あるいはガンディーによる南アフリカの「フェニックス・ファーム」改め「トルスト



世界各地から客家の「聖地」である寧化石壁に集まり行われる大祭(2009年10月、中国福建省三明市、小林宏至撮影)。

イ・ファーム」などにも影響を与えたことが述べられた。また、ヤースナヤ・ポリャーナの領地自体が遺族の意志などをうけて次第に聖地化、観光化されている現状もある。望月報告に関しては、もともと宗教的な意味での聖性とは無縁であり、また社会主義体制下では聖化そのものがあり得ない状況であったのに対して、とくにソ連邦解体後はトルストイの名声とともに聖地化、観光化するプロセスが豊富な事例とともに示された。

このように、両氏の報告からは、西欧近代的な意味での聖地概念にとっては周縁的な、しかしその本質を問い返すに余りある事例であった。このことは、近代的な、もっといえればプロテスタント的な意味での聖・聖性・聖俗概念を基盤にした「聖地」概念そのものが問い直されるべきであることを明確に示している。その意味では、ジャン・クロード・シュミットの、いわゆる「中世歴史人類学」において提唱する中世的概念の再評価と相まって、時間的(歴史的)、空間的(地理的)な意味での聖・聖地をめぐる詳細な「比較」研究が必要であることを明示している。

もともと本共同研究は、北大スラブ研において実施されていた科学研究費新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」(2008～2012年度)の分析枠組みを引きうけて、これを人類学的に換骨奪胎したものである。とくに「地域大国」、「比較研究」に関しては、スラブ研がわと意見交換しつつ、その視点をずらしながら新たな展開を図る意図があった。また、共同利用機関として同様のミッションを持つ国立民族学博物館とスラブ研との研究交流の可能性についても、宇山、望月などを交えて、継続的に検討していくことを確認した。その意味でも、今回の研究会は大いに成果があったものと考えている。

初年度から引き続き計5回の研究会を実施したが、毎回ほぼ全員が出席していることから、共同研究員相互の問題意識が共有され、共通理解も進んでいる。本年度は3年半計画の2年目にあたるが、基本的な三地域の研究者を軸に、比較の実をあげるよう、比較的問題意識を共有する三地域の研究者をゲストとして招聘しながら、時間的、空間的に西欧近代を相対化する作業を継続する予定である。

すぎもと よしお

国立民族学博物館民族文化研究部教授。専門は社会人類学、南アジア研究。南アジアの宗教・文化ナショナリズムの研究に従事している。著書に『スリランカを知るための58章』(共編 明石書店 2013年)、『キリスト教文明とナショナリズム—人類学的比較研究』(編著 風響社 2014年)、『スリランカで運命論者になる』(臨川書店 2015年)などがある。



聖なる階段池(クンダ)で沐浴をする巡礼者(2012年8月、マハラシュトラ州、松尾瑞穂撮影)。